

# 中学生の向社会的行動の変化と 全体的自己価値との関連

## —縦断データを用いた検討—

Longitudinal changes and relationships of prosocial behavior  
and global self-worth among junior high school students

山本ちか  
Chika YAMAMOTO

本報告の目的は、中学生の向社会的行動が中学1年から中学3年の間にどのように変化するかを検討し、向社会的行動と全体的自己価値の因果関係を検討することである。向社会的行動は、他の人のためになるよう意図された自発的な行動である。全体的自己価値は、どれだけ自分のことが好きか、満足しているかなど自分自身を肯定的あるいは否定的に評価する程度を示している。分析の結果、中学生の向社会的行動は、学年が上がるにつれて向社会的行動が少なくなっていた。いずれの学年でも男子よりも女子の方が向社会的行動を多く行っていた。また男子では、中学2年時点での向社会的行動が中学3年時点の全体的自己価値に影響していた。

The purpose of this study was to examine longitudinal changes of prosocial behavior, and to examine influences of prosocial behavior to global self-worth and influences of global self-worth to prosocial behavior among junior high school students. Prosocial behavior is the voluntary behavior that is aimed at to be good for other people. Global self-worth is the degree to which they likes oneself as a person and is happy with oneself.

Results suggested that prosocial behavior decreased during junior high school. In addition, females performed a lot of prosocial behavior than males. For males, prosocial behavior at eighth grade influenced global self-worth at ninth grade positively.

キーワード：向社会的行動、全体的自己価値、中学生、縦断的变化

Key words: prosocial behavior, global self-worth, junior high school students, longitudinal changes

### 【問題と目的】

困っている人を助けたり、慰めたり、自分の持っているものを他人に分け与えたり、寄付したりといった、他の人にプラスの結果をもたらすような思いやり行動を向社会的行動という(二宮, 2010<sup>1)</sup>). アイゼンバーグは、向社会的行動には、①その行動が他人あるいは他の人々についての援助行動であること、②相手からの外的な報酬を得ることを目的としないこと、③こうした行動には何らかの損失がともなうこと、④自発的になされることの4つの特徴があるとし、向社会的行動を「他の人のためになるよう意図された自発的な行動」と定義している(Eisenberg ら, 2006<sup>2)</sup>).

こうした向社会的行動を中学生はどのくらい行ってい

るのだろうか。また中学生の間、向社会的行動は増えていくのだろうか。それとも少なくなっていくのであろうか。本研究では、中学生は向社会的行動をどの程度行っているのか、中学1年から中学3年までの2年間でどのように変化するかを検討することを目的とする。

一方、自分自身全体について肯定的に評価しているのか、それとも否定的に評価しているのかの程度を示すものを全体的自己価値というが、日本の青年は全体的自己価値が低いということ、中学生から高校生にかけて特に低くなるということが示されている(山本, 2009<sup>3)</sup>; 山本, 2013<sup>4)</sup>; Yamamoto, 2011<sup>5)</sup>).

向社会的行動を行うことが向社会的行動を行う人自身に与える影響はいくつか考えられるが、その一つとして、

人から賞賛されたり、承認されたりすることにより、全体的自己価値や自尊心が高められるということが考えられる。また、自己価値が高くなることで、自分の行動に自信をもち、向社会的行動をさらに行うことができるのではないだろうか。本研究では、縦断データを用いて、中学生の向社会的行動と全体的自己価値の因果関係について検討する。向社会的行動と全体的自己価値の因果関係を検討するモデルとして、初回調査時点の2変数の値が初回調査から追跡調査の間における両変数の変化に影響を及ぼすか否かを検討するモデル(岡林, 2006<sup>6)</sup>)である交差遅延効果モデルを用いる。

本研究の具体的な検討事項は、以下の2点である。

- (1) 中学生が向社会的行動をどの程度行っているのかを検討し、中学1年から中学3年までの間に向社会的行動がどのように変化するのかを検討する。
- (2) 向社会的行動が全体的自己価値とどのように関連しているのか因果関係について、交差遅延効果モデルを用いて検討する。

## 【方法】

### 1. 調査実施時期

- 第1回目(中学1年): 2002年9月中旬から下旬
- 第2回目(中学2年): 2003年9月中旬から下旬
- 第3回目(中学3年): 2004年9月下旬

### 2. 手続きおよび調査協力者

調査は愛知県内9校と福島県内4校の中学生を対象に行った。調査の依頼は学校を通して行った。なお、調査は強制ではないこと、記入したくなければ記入しなくてもよいことを調査用紙に明記した。調査用紙の配布数および回収率はTable1に示した。

今回の分析は、3時点すべての向社会的行動と全体的自己価値の項目に回答のあった愛知県の中学生347名(男子157名、女子190名)について行った。分析には、SPSS(V21)およびAMOS(V18)を使用した。

Table1 配布数と回収率

	配布数	回答数	回収率
中1	1449	857	59.14
中2	1428	643	45.03
中3	1399	1075	76.84

### 3. 調査内容

調査時には、外的問題行動、内的問題行動、家族関係

の知覚、仲間関係の知覚等、他の変数についても調査を行ったが、今回の分析に使用した内容のみ以下に示した。分析には3時点、すべて同じ項目を使用した。

### (1) 向社会的行動

中学生が日常生活場面で行う向社会的行動について、この3ヶ月にどれくらいしたかを4段階評定(何度もあった、数回あった、一度だけあった、一度もなかった)でたずねた。順に4点から1点の得点を与えた。「困っている人を助けたこと」、「忘れ物をした人に自分のものを貸してあげたこと」、「落とし物を拾ってあげたこと」、「友だちが傷ついたときになぐさめてあげたこと」、「友だちの相談にのったこと」、「友だちがよくないことをしようとしてやめさせようとしたこと」の6項目である。

### (2) 全体的自己価値

自分に満足しているか、自分が好きであるかなど自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定(非常にあてはまる、かなりあてはまる、ややあてはまる、ややあてはまらない、かなりあてはまらない、非常にあてはまらない)でたずねた。順に6点から1点の得点を与えた。項目は、Harter(1988)<sup>7)</sup>の「Manual for the Self-perception Profile for Adolescence」の中の全体的自己価値についての項目、DuBoisら(1996)<sup>8)</sup>のSelf-Esteem QuestionnaireとRosenberg(1965)<sup>9)</sup>の自尊感情尺度を参考に作成した(日本語訳は山本・松井・山成, 1982<sup>10)</sup>を参考にした)。「今の自分が好きである」、「今の自分自身に満足している」、「時々自分がだめな人間だと思う」、「時々自分のことがいやになる」、「私はもっと自分に自信がもてたらいいなと思う」の5項目である。

## 【結果及び考察】

### 1. 向社会的行動の変化

向社会的行動を多く行っているほど高得点になるよう合計点を算出し、項目数で割ったものを尺度得点とした。得点の範囲は1点から4点である。平均値および標準偏差(SD)をTable2に示した。

得点が高かった項目は、「忘れ物をした人に自分のものを貸してあげたこと」や「友だちの相談にのったこと」といった項目であった。まず項目ごとに、時点(3)×性別(2)の分散分析を行った。「友だちがよくないことをしようとしてやめさせたこと」では、時点間差がみられ( $F=14.13, p<.001$ )、中学1年時点より中学2年時点の得点が低く、中学2年時点より中学3年時点の得点が低

Table2 時点別・性別の平均値と標準偏差 (SD)

		男子			女子		
		中1 平均 (SD)	中2 平均 (SD)	中3 平均 (SD)	中1 平均 (SD)	中2 平均 (SD)	中3 平均 (SD)
向社会的 行動	困っている人を助けたこと	2.00 (1.00)	1.76 (0.92)	1.75 (1.00)	2.02 (1.01)	1.86 (0.98)	1.78 (0.95)
	忘れ物をした人に自分のものを貸してあげたこと	2.62 (0.90)	2.45 (1.04)	2.52 (1.05)	2.63 (0.95)	2.66 (0.98)	2.61 (0.95)
	落し物を拾ってあげたこと	2.01 (1.07)	1.78 (0.97)	1.68 (1.01)	1.96 (1.06)	1.73 (0.99)	1.56 (0.84)
	友だちが傷ついたときになぐさめたこと	2.07 (1.02)	1.72 (0.99)	1.62 (0.96)	2.51 (1.07)	2.48 (1.09)	2.26 (1.09)
	友だちの相談にのったこと	1.89 (1.03)	2.02 (1.09)	2.15 (1.13)	2.58 (1.09)	2.96 (0.99)	2.92 (1.03)
	友だちがよくないことをしようとしてやめさせようとしたこと	1.76 (0.93)	1.62 (0.93)	1.53 (0.90)	1.64 (0.93)	1.48 (0.84)	1.31 (0.68)
	尺度得点	2.06 (0.73)	1.89 (0.69)	1.87 (0.73)	2.22 (0.70)	2.19 (0.69)	2.07 (0.62)
全体的 自己価値	尺度得点	3.50 (1.03)	3.50 (0.98)	3.38 (1.08)	3.05 (1.04)	2.82 (1.01)	2.81 (1.03)

くなっていた。男子より女子の得点が高かった ( $F=5.21, p=.023$ )。「困っている人を助けたこと」では、中学1年時点より中学2, 3年時点で低くなるという時点間差がみられた ( $F=8.88, p<.001$ )。「落し物を拾ってあげたこと」についても同様の結果であり、中学1年時点より中学2, 3年時点で低くなるという時点間差がみられた ( $F=15.70, p<.001$ )。「友だちが傷ついたときになぐさめたこと」では、交互作用がみられ ( $F=3.03, p=.049$ )、男子では1年時点より2, 3年時点で低下していた。女子では1, 2年時点より3年時点で低下していた。

一方「友だちの相談にのったこと」は、中学1年時点より中学2, 3年時点で高くなるという時点間差がみられた ( $F=12.31, p<.001$ )。男子より女子の得点が高かった ( $F=12.31, p<.001$ )。

「忘れ物をした人に自分のものを貸してあげたこと」については、時点間差も性差もみられなかった。

尺度得点についても時点 (3) × 性別 (2) の分散分析を行った結果、中学1年時点より中学2, 3年時点の得点が低いという時点間差がみられた ( $F=4.61, p=.032$ )。また男子より女子の得点が高いという性差がみられた ( $F=12.91, p<.001$ )。

なお、全体的自己価値についても、各項目の合計点を算出し項目数で割ったものを尺度得点とし、平均値及び標準偏差を Table2に示した。時点 (3) × 性別 (2) の分散分析を行った結果、中1時点より中3時点の得点が低いという時点間差 ( $F=4.91, p=.008$ ) がみられた。また男子より女子の得点が高いという性差がみられた ( $F=37.88, p<.001$ )。

## 2. 向社会的行動と全体的自己価値の因果関係の検討

向社会的行動と全体的自己価値の因果関係を検討するために、構造方程式モデリング (SEM) を用いて、3波のパネルデータを分析した。分析モデルには、交差遅延効果モデルを用いた (Fig.1)。分析は男女別に行った。

### a. 男子

最終的なモデルの推定結果を Fig.2に示した。  $\chi^2=12.317(p=.138)$ , 適合度の指標は, GFI=.975, AGFI=.933, CFI=.986, RMSEA=.059(90% C.I.=.000~.120)であった。まず、全体的自己価値の経年変化については、中学1年時点が中学2年時点に影響し、中学2年時点が中学3年時点に影響していた。向社会的行動の経年変化についても、中学1年時点が中学2年時点に影響し、中学2年時点が中学3年時点に影響していた。さらに中学1年時点が中学3年時点にも影響していた。全体的自己価値が向社会的行動へ及ぼす影響については、有意なパスはみられなかった。向社会的行動が全体的自己価値へ及ぼす影響については、中学2年時点での向社会的行動が中学3年時点の全体的自己価値に影響していた。

### b. 女子

最終的なモデルの推定結果を Fig.3に示した。  $\chi^2=3.851(p=.921)$ , 適合度の指標は, GFI=.993, AGFI=.984, CFI=1.000, RMSEA=.000(90% C.I.=.000~.028)であったが、全体的自己価値から向社会的行動への影響も、向社会的行動から全体的自己価値への影響も、いずれも有意なパスはみられなかった。全体的自己価値の経年変化については、中学1年時点が中学2年時点に影響し、中学2年時点が中学3年時点に影響していた。さらに中学1

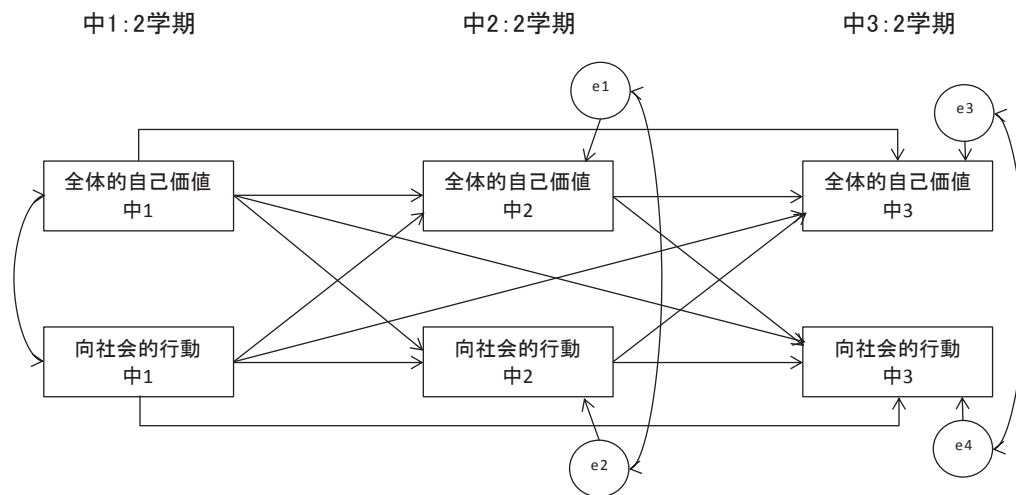
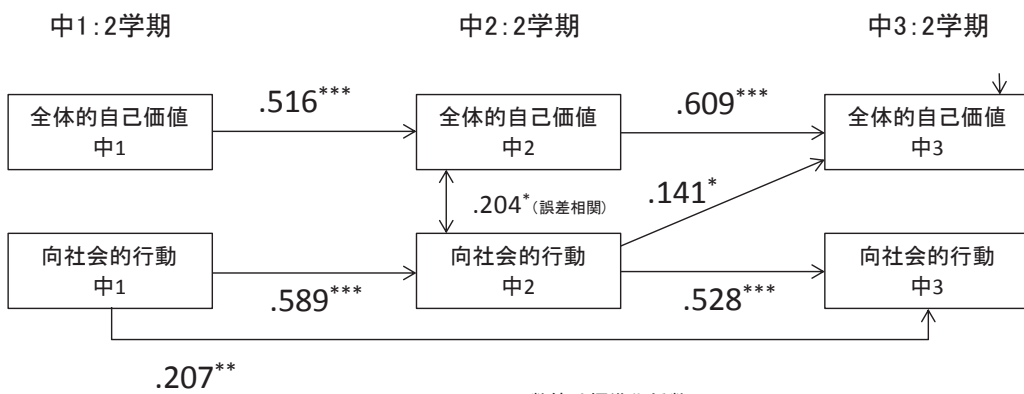
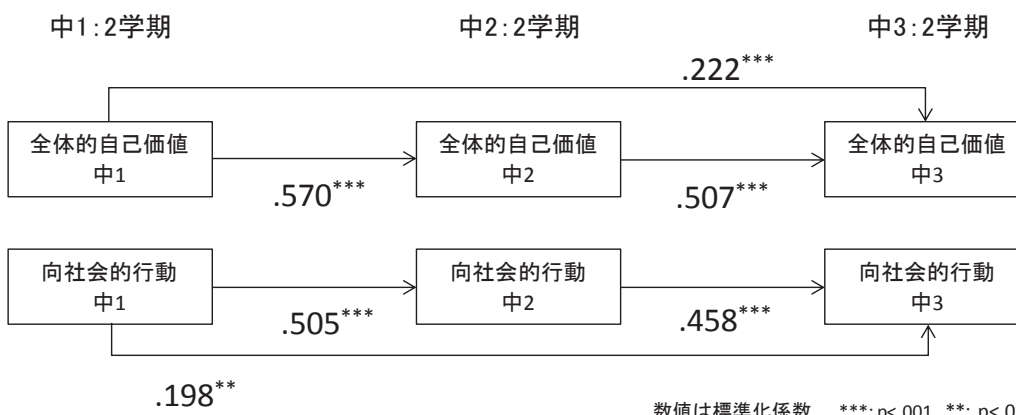


Fig.1 分析モデル



数値は標準化係数, \*\*\*:  $p < .001$ , \*\*\*:  $p < .001$ , \*\*\*:  $p < .001$

Fig.2 モデルの最終的な推定結果 (男子)



数値は標準化係数, \*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$

Fig.3 最終的なモデルの推定結果 (女子)

年時点が中学3年時点にも影響していた。向社会的行動も、全体的自己価値と同様の結果であった。

### 3. まとめ

本報告の目的は、中学1年から中学3年までの縦断データを用いて、向社会的行動の変化と、全体的自己価値の変化との因果関係について検討することであった。

その結果、学年が上がるにつれて向社会的行動が少なくなっていた。そしていずれの学年でも女子の方が向社会的行動をより多く行っていた。交差遅延効果モデルを検証した結果では、向社会的行動、全体的自己価値いずれも、男女とも中学1年時点が中学2年時点に影響し、中学2年時点が中学3年時点に影響するという経年変化がみられた。向社会的行動と全体的自己価値の因果関係については、女子では関連がまったくみられなかったが、男子では、中学2年時点での向社会的行動が中学3年時点の全体的自己価値に影響していた。

こうした結果から、女子については、向社会的行動と全体的自己価値には関連がなく、全体的自己価値の高さがどうであれ向社会的行動を行っており、向社会的行動を行ったからといって全体的自己価値は高くはならないと考えられる。しかし男子については、向社会的行動を行うことによって自分自身に自信を持ち、全体的自己価値が高くなる可能性が示唆された。

### 【文献】

- 1) 二宮克美 向社会的行動の判断 菊池章夫・二宮克美・堀毛一也・齊藤耕二(編著) 社会化の心理学／ハンドブック—人間形成への多様な接近 (pp.277-290) 川島書店 (2010).
- 2) Eisenberg, N., Fabes, R. A., & Spinrad, T. L., Prosocial development. In W.Damon & R. M. Lerner (Series eds.) & N. Eisenberg (Vol. ed.), Handbook of child psychology, 6nd ed. Vol.3: Social, emotional, and personality development. (pp.646-718) New York: Wiley. (2006).
- 3) 山本ちか 高校生の全体的自己価値の検討, 名古屋文理大学紀要, 9, 29-36. (2009).
- 4) 山本ちか 初期青年期の全体的自己価値および具体的側面の自己評価の発達的变化, 名古屋文理大学紀要, 13, 1-10. (2013).
- 5) Yamamoto Chika. Development of global self-worth and domain-specific self-evaluations during adolescence in

Japan. 17th European Conference on Developmental Psychology, (2011).

- 6) 岡林秀樹 発達研究における問題点と縦断データの解析方法, パーソナリティ研究, 15, 76-86. (2006).
- 7) Harter,S. *The Self-Perception Profile for Adolescents*. Unpublished manual, University of Denver, Denver, CO, (1988).
- 8) DuBois,D.L., Felner,R.D., Brand,S., Phillips,R.S.C., & Lease,A.M. Early adolescent self-esteem: A developmental-ecological framework and assessment strategy. *Journal of Research on Adolescence*, 6, 543-579. (1996).
- 9) Rosenberg,M. *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ; Princeton University Press, (1965).
- 10) 山本真理子・松井豊・山成由紀子 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-69. (1982).

### 【付記】

本調査は、科研費・基盤研究 (B) (1)14310055 (研究代表者: 氏家達夫, 研究分担者: 二宮克美, 五十嵐敦, 井上裕光) の補助をうけ実施された。本論文は、日本発達心理学会第25回大会 (2014), 日本心理学会第78回大会 (2014) において報告した結果をまとめたものである。本調査の実施にあたり、調査にご回答いただいた中学生の皆さま、並びに調査にご協力いただきました各中学校の先生方に心より感謝いたします。

また本調査の共同研究者であり、常日頃ご指導いただいている名古屋大学の氏家達夫先生、愛知学院大学の二宮克美先生、福島大学の五十嵐敦先生、千葉県立保健医療大学の井上裕光先生に厚く御礼申し上げます。

